

濱松宿 御問屋中様

〔宮川舍漫筆〕^四 椋鳥と雀合戦

同年^七○^{文政}七月廿五日より日々七時過より夜に入まで、むく鳥と雀と合戦有、處は小石川馬場

と眞光寺と金性院と、又加州侯の屋敷の森にて喰合、殊に湯島金性院にては、數人見物夥しく、

鳥の死骸多く、誠に一奇事なりとて、弟三右衛門も金性院^江見物に罷こし候、見物の人々群集に

て、寺内に容易に入る事成難しとなり、右に付本妙寺格定といえる僧、左の戲章なしたりとて見

せぬ、

雀入海中成蛤と、此節に及んで如何ぞたりけん、數萬の椋鳥幾群となく四方より飛集り、湯島

なる金性院の境内にて、兩三日むく鳥と戦ひ、其害せられし者數をえらす、鶯、蛙、杯の合戦をば、

嘶にも聞しかど、その戦は古今に稀なるよし、人の語りけるを、傍に聞居て、口すさびける、

小鳥など、我をあざむく鳥ならば羽た、きさせじす、めものども

右むく鳥雀の合戦はいまだきかず、往年予が父^父○^{宮川}政運^實の門人小林金之助なるもの、御代

官手附にていづれの國にてか、處は忘れしが、狐合戦有て、野原に狐ども數多死して有之趣を、書

狀に申越たりき、是又奇代の事のよし、父なるもの、嘶に聞ぬ、今此椋鳥すゝめの合戦も奇なら

すや、

〔燕居雜話〕^三 湯島根生院群雀

天保四年癸巳の七月半の比より、湯島根生院の境内樹木喬々然として、蔚茂したるが中に、黄昏

より雀幾百千といふことを知らず群集りける、凡一月ばかり、皆二隊に分れて、鬪ひつゝ、地に墜

て死するも有るなど、て、見に集る者多かりき、瑜^尾○^日も講書の歸るさに立寄て須臾見たりし

が雀の幾群も、飛來ることは、度々なりしかども、鬪ひけるさまには、あらざりき、或は云東叡